「日本アマチュアアニメーション映画協会」設立における一考察

森　下　豊　美

A Study Looking at the Setting Up of the "Japan Amateur Animated Film Association"

MORISHITA Toyomi

Abstract: This paper investigates the setting up process of the "Japan Amateur Animated Film Association in 1965", which has never been studied before, mainly referencing the animation-related articles of the amateur film magazine "Kogata Eiga（Cine Film）" – which inspired the establishment of the association – from its first edition in 1956 to its final edition in 1982 as well as the way the readers of the magazine, who are the animation creators, supplemented and participated while incorporating Marshall McLuhan's "Hot vs. Cool Media" concept. Starting in the 1950s, "Kogata Eiga" introduced filming techniques of "Motion Pictures and Letters" which was still not generally known as "Animation" then, and the number of articles related to animation production increased gradually. Additionally, as the magazine provided a media where they could present their work, the nurturing process of the creators became clear.

Key Words: Cine Film, Animation, Amateur

要旨：本稿では，これまで検討されてこなかった 1965 年結成の「日本アマチュアアニメーション映画協会」の設立過程に重点をおきながら，設立の契機となったアマチュア映画専門誌『小型映画』の 1956 年の創刊号から 1982 年の終刊に至るアニメーション関連記事を中心に調査し，マーシャル・マクルーハン[1] による「熱いメディアと冷たいメディア」概念を援用し，雑誌読者であるアニメーション制作者たちの補完行動や参与性に注目し検証した。『小型映画』では「アニメーション」と言う呼称が一般的ではなかった 50 年代から「動く絵や文字」の撮影方法が紹介され，アニメーション制作に関する記事も段階的に増加する。また雑誌が作品発表の機会を提供する事で，作家が育成される過程を確認する事ができた。

キーワード：小型映画，アニメーション，アマチュア

は　じ　め　に

国内の個人制作アニメーションは，1960 年代の「アニメーション 3 人の会」の様な漫画家，イラストレーターなど隣接分野のプロによる作品が世界の国際映画祭で評価を得て研究対象となることはあった。しかし同時代に高いレベルの作品を制作していたアマチュアの作家集団についてはこれまで注目されることはなかった。その集団とはアマチュア映画専門雑誌『小型映画』の複数の会員やライターが参加した「日本アマチュアアニメーション映画協会」（以下「日本 AAF 協会」とする）である。「3 人の会」より早く，もしくは同時代に国際映画祭のア

ニメーション部門で上位入賞を果たし評価を得ていたメンバーを含んでいたにも関わらず，これまで彼らの作品や活動は顧みられることはなかった。

「日本 AAF 協会」については『アマチュア映画年鑑』やインターネットの一部で協会の概略を見ることは出来るが，詳細な研究や検証がなされておらず先行研究は乏しい[2, 3]。

したがって本稿では複数のアマチュアアニメーション作家とも関わりの深い『小型映画』の，アニメーション関連記事を中心に調査を行い，雑誌がアニメーション制作者育成にいかに関与したかと共に，作家の参与性も検証することで今まで見過ごされて来た作家と作品を浮き彫りにし，それらを国内のアニメーション史に周縁的歴史として提示したい。

1.『小型映画』におけるアニメーションの位置付け

1-1　初期のアニメーションの記事

はじめに創刊初期の『小型映画』のアニメーション関連記事の変遷を概観し，その位置付けを確認したい。

まず『小型映画』創刊の目的を確認する。創刊時の編集後記では雑誌を次の様に紹介している。

> 私達はこの誌面を，8 mm を主とし，6 mm，スライドの各面を含めたものにしたい（略）『小型映画』発刊を機に「友の会」をつくりました。微力ではありますが「第二回カルカソン市アマチュア・シネコンクール」のお世話をいたします。詳細は本紙別刷をごらん下さい。なお今後会としての種々の計画も立ててゆきたいと思います[4]。

> さて第 2 号は，第 1 号の不備の点を補いながら，シナリオや映画の文法等を映画の理論的裏付け記事を挿入すると共に，8 mm 撮影の手引，50 呎でも出来るホーム・ムービー等，楽しめるアマチュア映画の実技を広く編集してみました（略）[5]。

上述の通り『小型映画』は主にアマチュア映画制作者に向け刊行された雑誌であり，カメラの機構の紹介や操作方法だけでなく，理論に基づいた脚本の執筆方法や撮影方法などで構成されている。アニメーションに関する記事は多くはないが，動くイメージの制作方法については創刊当初から連載されている。1956 年から 1957 年まで池上信次による「タイトルの作り方」が連載され，それ以降も山三平による「私といっしょにタイトルを作りましょう」,「タイトル立体講座」など，ほか複数の作家によって紙に書いた文字や絵，切り紙などを照明やマスクを使用し撮影する方法が紹介されてきた。ただしそれらは流し撮りで撮影された「変化する文字や絵」であり，正確にはアニメーションではない。

誌上でアニメーションの制作方法に触れた最初の記事は 1956 年の田口泖三郎による「新しいジャンルを発見した　短編映画「線と色の即興詩」」である。ノーマン・マクラレンのシネカリ作品が「短篇映画」として紹介され，カメラを使用せずフィルムを削って制作する方法がスチールとともに克明に解説されている[6]。また 1957 年には「トリック撮影」の特集として身近な物を一コマ撮りする方法が紹介され[7]，1958 年には荻野茂二によって「特殊映画への招待」が寄稿されている。荻野は戦前に複数のアニメーションを発表していたアマチュア映画作家である。この記事では「前衛映画とか特殊映画とかいうものをつくってみようという人のために」日常にある物を発想源とし抽象化する方法論を自作の抽象アニメーション『PROPAGATE』（1935）のスチールとともに提示している。また荻野はここで人形映画，影絵映画における「動き」の技術的解説も行なっている[8]。

創刊当時『小型映画』では「トリック映画」や「人形映画」,「影絵映画」,「特殊映画」を誌上で紹介しているが「アニメーション」と言う呼称は使用していない。現在それらを総称する「アニメーション」は，当時一般用語ではなかったのがその理由である。国内のアニメーションの呼称の変遷に関する研究は西村智弘の著書に詳しい[9]。

誌上で初めて「アニメーション」という呼称が確認出来たのは，1959 年 7 月号の服部精による「アニメーション・マニヤ（原文ママ）におくる　漫画映画の作り方」の記事の中である。服部の解説は次の様なものである。

ふつう，アニメーション（動画）と呼ばれるものには，影絵映画，人形映画，線画，そして漫画映画の四つがあります。その中で最もやさしいのが影絵映画，そして最も手数がかかり難しいのが漫画映画という事になっております。漫画映画は一寸した短編を作るのにも，数千枚，数万枚といった動画を一枚一枚セルロイド板に描くのですから，なみたいていの手数ではありません。（略）要は絵の枚数を減らして，しかも動きが不自然でないようにすれば，われわれにもなんとかなるのです。それには，セルロイドに一枚一枚描く方法をやめて，紙に描いた絵を切り抜いて，影絵映画と同じように，この切抜いた絵を動かしてやればよいのです。いわば，切抜法による漫画映画という事が出来ます[10]。

服部はこの記事で，当時まだ一般には浸透していなかった「アニメーション」と言う言葉を使用し，そのサブジャンルに「漫画映画」,「影絵映画」,「人形映画」,「線画」を位置付けている。国内の「アニメーション」の呼称の伝播は 60 年代に活躍した「アニメーション 3 人の会」による影響が考えられているが，この様に専門誌では 50 年代終わりには使用され始めた。またここで誌上で初めて「アニメーション」が取り上げられたのには 2 つ理由が考えられる。一つ目はこの前年に公開された東映動画による国産初のカラー長編漫画映画『白蛇伝』（1958）の影響である。『白蛇伝』は東映動画が「東洋のディズニー」を目指し，4047 万 1000 円の製作費と動画 6 万 5213 枚を費やし製作され，当時「第 9 回ブルー・リボン特別賞」,「第 13 回毎日映画コンクール特別賞」,「第 11 回ベニス国際児童映画祭特別賞」など多くの映画賞を受賞し大きな注目を集めた作品である[11]。多くのメディアも国産の本格的漫画映画誕生を取り上げ，漫画映画が注目される契機となったと考えられる。

二つ目はこの記事の同年に公開された横山隆一主催「おとぎプロダクション」による『ひょうたんすずめ』（1959）の影響が考えられる。『ひょうたんすずめ』については滋野辰彦が「アマチュアのための映画評」で次の様に言及している。

動画映画の製作には，人手と日数と費用の面倒があるため，東映の動画部をのぞけば，日本では大会社も小製作所も，滅多に手を出さない。そこで本職は漫画家である横山隆一が，長篇漫画映画「ひようたんすずめ」をつくると，映画界はおどろいてしまうということになる。漫画家であるから，作画やギャグのアイディアにすぐれていることは言うまでもない。日本の古い民話に取材したもので，登場する動物はスズメとカエルの二つだけである。（略）ともかく前作「ふくちゃん」におよばないけれど，映画の作家としては，つい先頃までアマチュアにすぎなかった人が，これだけ立派な漫画映画をつくったことは，われわれに大きな刺戟をあたえる[12]。

この様に滋野は本作をプロの漫画家による作品ではあるがアマチュア作品と位置付け，他の作家たちに刺激や希望を与えるとして評価している。また同年 8 月号からは漫画家の佐次たかしによる連載「トリック映画 A から Z まで」が始まる。ここではコマ撮りの人形アニメーションを「トリック映画」として紹介している。

当初アニメーション関連の記事は多くはなかったが，長編漫画映画が注目され誌上で取り上げられる回数が増加したこの年，雑誌創刊時からの企画で選抜された応募者の一人が，フランスのカルカソンアマチュア国際映画コンクールのアニメーション部門で一等賞を獲得した報が掲載される。それは後に「日本アマチュアアニメーション協会」設立者の一人となる小松英人である。

1-2 『小型映画』とコンクール入賞者

『小型映画』では 1957 年から雑誌が主催となり「全日本アマチュア映画コンクール」を開催している。募集規定には入賞者への海外コンクール斡旋や誌上での発表，及び全国主要都市での作品上映などの援助が謳われている。また選外作品に対しても編集の技術的，理論的助言や指導を行い小型映画の成長を促すとしている[13]。その記述通り『小型映画』はコンクール上位入選者に対し誌上での活躍の場を積極的に提供している。

例えば服部精による影絵映画『パパは 8 ミリ狂』（1956）は「全日本アマチュア映画コンクール」第一回で入選している[14]。服部は前節で初めてアニメーションの定義を誌面で紹介したとして取り上げた作家だが，受賞当時のプロフィールを確認すると焼津在住の歯科医であり専業ライターではない。しかしこの受賞以後，誌上でアニ

メーション関連記事を担当するに至ったと考えられる[15]。

また『小型映画』は創刊時からカルカソン国際アマチュア映画コンクールへの出品を積極的に援助している。このコンクールは「参加作品のサイズは八ミリと十六ミリの二つで，部門は劇，教育，音楽など七つに分れているが，カルカソン市最高賞は全部門を通じサイズごとに決められることになっている。このほか各部門ごとに大賞，一等賞，二等賞各一があ[16]」る。このコンクールに向けて創刊号で作品募集が行われ，雑誌主導で出品された作品 3 本が最高賞，大賞，二等賞と入賞し，その報は当時東京新聞，日本経済新聞ほか各紙でも報道された。その後，雑誌主催で大々的に開催された受賞映写会の様子が誌面を飾っている。来賓にフランス大使代理を迎え，フランス外務庁，カルカソン市市長および駐日フランス大使からの祝辞も紹介されるなど，当時この国際映画祭での受賞は大きく取り上げられ注目された[17]。

この様に『小型映画』では雑誌主催，または主導による国内のコンクール入選者を中心に国際映画祭への出品を斡旋していたが，そこで小松英人の作品『夢』（1958）が「第 5 回カルカソン国際アマチュア映画コンクール」アニメーション部門一等を受賞する。

誌上では小松の受賞に際して次の様な記事を掲載している。

> 本誌創刊を記念して結成された，小型映画友の会が，これまで四回にわたって南仏カルカソン国際コンクールに吾が国の代表作品のあっせんを行って来たが，今年も小松英人氏の「夢」を出品，又々一等入賞の栄冠を獲得した。（略）
>
> 小松英人氏作「夢」は小型映画友の会，国際文化振興会共催で昨年行った「東京国際コンクール」で入選した 8 ミリモノクローム（30 メートル）100 フィートの作品である（略）
>
> この作品について，カルカソン市の新聞評では，「東洋人特有のネバリ強さと，しかも忍耐によって普通郵便切手の約 1/8 の大きさのフィルム面に，手で掻き削り，染色しながら作った作品で，非常に興味深い」としている[18]。

この小松の『夢』は「シネカリグラフ」という技法で制作されたカメラレス・アニメーションである。日本では通称「シネカリ」と呼ばれ，黒いフィルムを先の尖った針などで削り，多くの場合削った部分に染色が施され，各コマで削られた線やモチーフの瞬間的変化や揺らぎが独特の視覚効果をもたらすアニメーション技法である。『夢』では約 8000 コマを一コマずつ針で傷つけ，染色はマジックインクで行っている。また一コマに全ての情報は描かず，例えば魚の輪郭，魚の目，そして背景を別々のコマに分割して描き，残像効果を利用することで自然に見せる工夫を小松はインタビューで答えている[19]。

またこの作品は 1963 年の『芸術新潮』で「マクラレンもチェコの動画も見ていない氏を考えれば，これはすばらしい独創である」と評価されている。このことから当時小松はマクラレン作品は未視聴だったことが窺える[20]。カナダの NFB に在籍した作家ノーマン・マクラレンによるシネカリ作品『線と色の即興詩』（1955）は「1956 年に日本で劇場公開されて話題となった」作品で，先述の田口によって『小型映画』誌上でも紹介された[21]。当時小松は『線と色の即興詩』からの影響の有無については言及していないが，小松自身のオリジナルな発想や手法であると言う主張もなかったこと，そして 1979 年刊行の著書でシネカリ作品について「マクラレンが有名」と紹介していることからも，当時田口の記事に触発されシネカリを試みた可能性は高いと考えられる[22]。

この様に『小型映画』では段階的にアニメーションの記事が増え，雑誌からコンクール入賞者も誕生した。また彼らの作品を誌面で発表するだけでなく，アニメーションにまつわる技法や知識を作家本人に寄稿させた事で，専門性を持つ作家育成に寄与していたと考えられる。

2.『小型映画』と「日本アマチュアアニメーション映画協会」

2-1 「日本アマチュアアニメーション映画協会」発足

60 年代に入ると，小松以外にも複数の作家のアニメーションが『小型映画』誌上で取り上げられ，その後作家本人がアニメーション制作にまつわる記事を寄稿する事で，次第にアニメーションの記事が充実し始める。例え

ば漫画家の佐次たかしは 50 年代からトリック映画という形でアニメーション制作の記事も担当していたが，1960 年の「ナクサ全国コンテスト第 7 回」で佐次のアニメーション作品『折紙の幻想』が入選以後，「アニメーション」の記事も多数執筆している[23]。また木津和夫は 1962 年 12 月「今月の映画」コーナーで作品が紹介されたのをきっかけに，翌 1963 年 1 月には作家特集コーナーでコマ撮りアニメーション制作方法を発表している[24]。さらにその翌月 2 月号の同コーナーでサトウ宗政が影絵映画制作に関する機材，素材，作品制作の方法論などを披露している[25]。

この様にアニメーションに関する記事や特集が増え作家も育ち始めた 1965 年，10 月号で「日本アマチュアアニメーション映画協会」の発足が発表される。誌上では「発会式は 8 月 23 日，東京銀座東区民会館で発起人が集って行われたが，今後，映写会や研究会，プロアニメ作家を囲む座談会なども行いたいという。なお同協会は全国組織もめざしている」として荒井淳，今田清一，平嘉門に加え，『小型映画』でアニメーションを発表していた木津和夫，小松英人，佐次たかし，サトウ宗政ら 7 名が発起人として紹介されている[26]。

協会設立以後「日本 AAF 協会」は活発な活動を行っている。例えば協会メンバーによる共著では「毎年六月に“日本アマチュアアニメーション映画祭”と名づけて新作発表試写会を開き」また，「毎月第三水曜日に定例会を開き，アニメ製作の研究，会員作品の随時上映，合評，海外アニメーション映画の鑑賞など[27]」の活動内容を紹介している。『小型映画』でも「日本 AAF 協会」の映画祭の盛況が何度も取り上げられ，彼らの活動は誌上でも評価された[28]。

2-2 「日本アマチュアアニメーション映画協会」の活動

表 1 は「日本 AAF 協会」が発足した 1965 年から『小型映画』終刊の 1982 年までの誌上で報告された「日本 AAF 協会」の活動を調査し一覧としてまとめたものである。これは実働の一部ではあるが，設立初期の例会では「日本 AAF 協会」発起人を中心に作品上映会や研究会が積極的に行われ，誌面では不可能な実際のフィルムの鑑賞とメンバー同士の直接的な交流を実現していたことが窺える。また，1968 年 5 月に開催された「第 1 回アマチュアアニメーション映画祭」以後，毎年一度の映画祭開催が確認できる。そして映画祭も回を重ねるごとに上映作品が増加し，80 年代には大学のアニメ研究会が参加していることからも，その後の大学アニメ研究会における自主アニメや自主上映会への影響や接続も考えられる。

本稿の調査は『小型映画』終刊の 1982 年までだが，元「日本 AAF 協会」会員であり『小型映画』のライターでもあった小松沢甫によれば，協会が解散するまで例会は毎月行われ，映画祭は 1993 年第 26 回を最後に，そして翌年には協会も解散し，30 年近く続いた活動はここで終了する[29]。「その理由を，ビデオ化による 8 mm 界全体の衰退に加え，当時ビデオがコマ撮りもプロジェクター映写も出来なかったという機材的な事も，解散に至った要因だったと述べている[30]。」

また「日本 AAF 協会」と同時代に注目されていた草月アートセンター主催の「アニメーションフェスティバル」と比較した場合，「アニメーションフェスティバル」は主催のアートセンター解散によりフェスティバル継続が不可能となり 70 年代初頭に終了した。しかし「日本 AAF 協会」は協会メンバーによる自主運営によって研究会や上映会が開催され，新規会員を受け入れていた事も上映会に十分な作品数と新しい作家の確保に繋がり，長期に渡る協会運営を可能にした要因になったと考えられる。

表 1　『小型映画』記載「日本アマチュアアニメーション映画協会」活動一覧（筆者調べ）

開催日時	開催場所	概要
1965 年 8 月23日	銀座東区民会館	日本アマチュアアニメーション協会発足発表会。発起人：荒井淳，今田清一，木津和夫，小松英人，佐次たかし，サトウ宗政，平嘉門。
1965 年10月21日 午後 6 時	銀座東区民会館	記載なし
1965 年11月30日（火） 午後 6 時	銀座東区民会館	記載なし
1966 年 2 月19日（土） 午後 6 時	銀座東区民会館	2 月例会「今田清一氏の夕べ」 【上映作品】『夢の花』，『損悟空』。今田を囲み質疑応答。ほか森岡敏『落葉の枝』，今田定男『平塚七夕祭』上映。

1966 年 3 月 9 日（水） 午後 6 時	銀座東区民会館	3 月例会「熊沢半蔵氏の夕べ」 【上映作品】熊沢半蔵『アリスと山の子』（‘61 東京国際コンクール）『かぼちゃ』（‘60 サクラコンテスト）『からすのしかえし』（‘63 東京国際コンクール），木津和夫『集金人』。 熊沢を囲み質疑応答。 「同一テーマで会員による 25～50 フィートのアニメ映画競作」の提案。題名が『女』決定。
1966 年 4 月21日（日） 午後 6 時	銀座東区民会館	4 月例会『荒井淳氏の夕べ』 【上映作品】荒井淳『梟』（シルエットアニメ），『愛の灯』（影絵映画），『みかん』。
1966 年 5 月20日 午後 6 時	銀座東区民会館	5 月例会「セル板描絵解説」 【上映作品】吉田慶一『てんぐのこんちゃん』，木津和夫『押絵と旅する男』，佐次たかし『手袋を擬人化したアニメ作品のラッシュ』。
1966 年 6 月27日（月） 午後 6 時	銀座東区民会館	6 月例会 【上映作品】サトウ宗政『おちん藤太』『オンザギンザ』，朝比奈武文『女』，岩崎ツギ夫『現代の戦争』，今田清一『秋々々』。
1966 年 9 月15日（月） 午後 6 時	銀座東区民会館	9 月例会 【上映作品】本橋松尾『わんぱくつみき』，荒井淳『びんの子』，浜田馨『美の饗宴』。
1968 年 5 月15日 午後 6 時	ブリヂストンホール	第 1 回日本アマチュアアニメーション映画祭 【上映作品】共同制作『会員紹介』，小松英人『夢』，佐次たかし『8 ミリウエスタン・さすらいのガンマン』，平嘉門『牡丹灯記』，荒井淳『街のなかの孤独』『線のデザイン』，今田清一『題名の不在』，永原達也『サイケデリック・モノローグ』，酒井曽一『蛙の散歩』，本間英夫『Flying-Saucer』，野北晏照『放浪記／鳥』，古山勝祐『白』，熊沢半蔵『狐』，朝比奈武文『戦車』，町田徳五郎『夜の室内楽』。
1969 年 5 月 9 日 午後 6 時	銀座東区民会館	5 月例会 【上映作品】荒井淳『或る変成』，今田清一『みつ』，石渡かおり『まりとねこ』，熊沢半藏『たべる』，長島正太郎『Wonder Land』，浜田馨『ビジュ』，本間英夫『Maching』，町田徳二郎『空』，安井照明『あまりにも日本的な』。
1969 年 5 月14日 午後 6 時	ブリヂストンホール	第 2 回日本アマチュアアニメーション映画祭
1969 年 9 月26日	銀座東区民会館ホール	「田中ヨシハル作品集の夕べ」 【上映作品】田中ヨシハル『恋人の森』『コンニチワ 21 世紀』『未来の 8 ミリ』『傘のある風景』『シャッポ』。
1969 年 6 月26日（木）	銀座東区区民会館 3 階	6 月例会 【上映作品】永原達也『サイケデリック，モノローグ』，今田清一『題名の不在』。
1970 年 5 月15日 午後 6 時	ブリヂストンホール	第 3 回日本アマチュアアニメーション映画祭 【上映作品】町田徳五郎『鹿のなげき』，相原信太『ガム』，永原達也『AL』，朝比奈武文『蟻蜂の夜』，暮田周治『とまらない汽車』，浜田馨『ビジュ（改訂版）』，熊沢半蔵『アニメぶんれつショウ』，安井照明『？？』，青木寿一郎『安来節』，高松政男『KISSTYPE』，平嘉門『牡丹灯籠』，荒井淳『パターン』，長島正太郎『人間の絆』，佐次たかし『はには園幻想』，以上 14 編作品。
1970 年10月 5 日	銀座東区民会館	例会 【上映作品】今田清一『題名の不在』，熊沢半蔵『からすの仕返し』，児島範昭『NHK 特撮風景』『模型列車ラッシュ』。
1970 年11月21日	銀座東区民会館	例会 【上映作品】鈴木義行『公園の森の物語』『白樺物語金魚物語』，作者不明『ある日の中津渓谷』，酒井真知子『男と女』，暮田周治『とまらない汽車』『JAPAN』，相原信太『IMAGE』，平嘉門『名月佐原囃子』，永原達也『TUBEISM』『AL』『MYSONGS』。
1971 年 2 月27日 午後 6 時	銀座東区民会館 3 階 広間	例会 【上映作品】 クレタプロ『CF 集』，電通『CF 集』，虫プロ『ジャングル大帝』『タイトルバック』『展覧会の絵（シネスコ）』，永原達也『CF（シネスコ）』。
1971 年 5 月14日	ブリヂストンホール	第 4 回日本アマチュアアニメーション映画祭 13 本オール新作。
1971 年10月 5 日	銀座東区民会館	例会 【上映作品】今田清一『題名の不在』，熊沢半蔵『からすの仕返し』，児島範昭『NHK 特撮風景』，児島範昭『模型列車ラッシュ』。
1975 年 6 月12日（木） 午後 6 時	安田生命ホール	第 8 回日本アマチュアアニメーション映画祭 【上映作品】安井照明『月しょく』，朝比奈武文『むかしの唄』，長島正太郎『いのち』，高松政男『きみも見たいか』，暮田周治『曲と直』，徳山利朗『幻想』，原山晶彦『おさるがサ』，長田耕三『どっちもくたびれた』，萩原多郎『怪識だ！』，能沢半藏『曲馬団』，保田玲子『雪』，酒井真知子『VISIONPARTⅡ』，平嘉門『珍大人』佐次たかし『ブック・ブック』，青木寿一郎『作りゃいいんだろ』，永原達也『ジョンカラ考』，鈴木義行『私のミニ鉄道』。
1976 年 6 月15日（火） 午後 6 時 30 分	新宿朝日生命ホール	第 9 回日本アマチュアアニメーション映画祭 【上映作品】暮田周治『夢は夜ひらく』，朝比奈武文『夕焼のバラード』，保田玲子『SEI の神秘』，永原達也『世話情無今様豆撒』，高松政男『たいやきやいた』，熊沢半藏『小さな夢』，佐藤輝信『星の子』，安井照明『ドッキリアニメ』，長田耕三『大物』，原山晶彦『ボクの家のばあい』，長島正太郎『幻』，武林薫『チャイニーズスープ』，酒井真知子『スーパースター』，佐次たかし『妖花ボインセチア』，鈴木義行『新版パンツ』，徳山利朗『LOVE’SGONE』。
1978 年 （日時記載なし）	新宿朝日生命ホール	第 11 回日本アマチュアアニメーション映画祭

1980 年 6 月 5 日 午後 6 時	新宿朝日生命ホール	第 13 回日本アマチュアアニメーション映画祭 【上映作品】高松政男『AH! ムジョー』，長島正太郎『The Black Cat』，朝比奈武文『寒椿』，熊沢半蔵『ついてない』，永原達也『パックマンのモク示録』，映総数 17 本。
1982 年 6 月30日 午後 6 時	新宿朝日生命ホール	第 15 回目日本アマチュアアニメーション映画祭【上映作品】上松辰巳『復活／幸福エンドレス』，山根恵子『幻遊』，小坂泰吉『9』，朝比奈武文『逢魔刻』，鈴木義行『振』，荒井淳『幻映』，藤井彰『チェイス』，原山晶彦『SQURE』，菊地彰一『きのこくらげのてんてんてじな』，菊池彰一『てじな』，中央大アニメ研『チャイニーズ・エンジェル』，高松政男『切る男』，熊涙半藏『ジャリがき』，森田晃『CARNIVAL』，雨宮慶太『フィルム・オブ・イラストレーション Part Ⅱ』，長谷川昭彦『赤ずきんちゃん気をつけて』，佐次たかし『青砂』，松村みか『道草』，長島正太郎『IMAGE』，原山麻美子『おでかけですか』，永原達也『復刻版パックマンの対決』，成蹊大アニメ研『聖野菜祭（セントベジタブルデイ）』，創価大アニメ研『宇宙ができるまで他』。

お　わ　り　に

本稿では 1956 年から 1982 年まで刊行された『小型映画』のアニメーション関連記事を中心に調査し，雑誌がアニメーション制作者育成にも関与し，その作家たちが「日本アマチュアアニメーション映画協会」設立にも寄与し，研究会や上映会を行うに至る経緯を確認することが出来た。

しかし，1982 年以降の「日本 AAF 協会」の活動や，そこで発表された作品や作家の検証，及び同時代の他の作家との影響関係などの調査の必要性はあるため，それらを今後の課題とし引き続き調査を継続したい。

謝辞

資料提供，及び調査に協力頂いた小松沢甫氏，五味洋子氏に感謝します。

引用・参考文献・URL

1　Marshall McLuhan（1964）. UNDERSTANDING MEDIA The Extensions of Man. McGraw-Hill Book Company.（マーシャル・マクルーハン　栗原裕・河本仲聖（訳）『メディア論－人間の拡張の諸相』，みすず書房，1987 年）
2　五味洋子「その 45　第 3 回全国総会」『アニメーション思い出がたり』http://www.style.fm/as/05_column/gomi/gomi45.shtml（2020 年 10 月 28 日）
3　小谷佳津志「ピピアめふアニメ教室」http://plaza.harmonix.ne.jp/~kotani/pipia 20060716.html（2020 年 10 月 28 日）
4　「編集室」『小型映画』，玄光社，1956 年 5 月号（第 1 巻第 1 号　通巻 1 号），p.63
5　「編集室」『小型映画』，玄光社，1956 年 6 月号（第 1 巻第 2 号　通巻 2 号），p.63
6　田口泖三郎「新しいジャンルを発見した　短編映画「線と色の即興詩」，『小型映画』，玄光社，1956 年 6 月号，p 23
7　「トリック撮影」『小型映画』，玄光社，1957 年 2 月号（第 2 巻第 2 号　通巻 10 号），pp.22-23
8　荻野茂二「特殊映画への招待」『小型映画』，玄光社，1958 年 5 月号（第 3 巻第 5 号　通巻 26 号），pp.19-21
9　西村智弘『日本のアニメーションはいかにして成立したのか』，森話社，2018 年
10　服部精「アニメーション・マニヤにおくる　漫画映画の作り方」『小型映画』，玄光社，1959 年 7 月号（第 4 巻第 8 号　通巻 43 号），pp 28-31
11　東映ビデオ株式会社 https://www.toei-video.co.jp/special/hakujaden/（2020 年 10 月 28 日）
12　滋野辰彦「アマチュアのための映画評」『小型映画』，玄光社，1959 年 4 月号（第 4 巻第 4 号　通巻 39 号），pp.116-117
13　『小型映画』，玄光社，1956 年 11 月号（第 1 巻第 7 号　通巻 7 号），pp.54-55
14　『小型映画』，玄光社，1957 年 6 月号（第 2 巻第 6 号　通巻 14 号），p.26
15　「アマチュアの作品拝見」『小型映画』，玄光社，1957 年 4 月号（第 2 巻第 4 号　通巻 12 号），pp.42-43
16　「小型映画に初の国際的成果」『小型映画』，玄光社，1956 年 7 月号（第 1 巻第 3 号　通巻 3 号），pp.41-42
17　「小型映画の祭典華やかにひらく」『小型映画』，玄光社，1957 年 2 月号（第 2 巻第 2 号　通巻 10 号），pp.15-19
18　『小型映画』，玄光社，1959 年 10 月号（第 4 巻第 12 号　通巻 47 号），pp.37-38
19　「シネファン訪問 43」『小型映画』，玄光社，1959 年 11 月号（第 4 巻第 14 号　通巻 49 号）pp.46-47
20　荻昌弘「独創性とリズム――小松英人氏作品」『芸術新潮』，新潮社，1960 年 9 月号，pp.240-243
21　西村智弘『日本のアニメーションはいかにして成立したのか』，森話社，2018 年，p.160
22　小松英人「フィルムにじかに描くアニメ」『8 ミリアニメ映画の作り方』，朝日ソノラマ，1979 年，p.151
23　日本小型映画連盟編『アマチュア映画年鑑』，日本小型映画連盟，1975 年，p.296
24　木津和夫「私はこんなものが撮りたい」『小型映画』，玄光社，1963 年 1 月号（第 11 巻第 1 号　通巻 93 号），pp.47-50
25　サトウ宗政「私はこんなものが撮りたい」『小型映画』，玄光社，1963 年 2 月号（第 11 巻第 2 号　通巻 94 号），pp.48-51
26　「小型映画新聞」『小型映画』，玄光社，1965 年 10 月号（第 16 巻第 5 号　通巻 129 号），p.92
27　日本アマチュアアニメーション映画協会編『8 ミリアニメ映画の作り方』，朝日ソノラマ，1979 年，p.173

28 「クラブ便り」『小型映画』，玄光社，1970 年 9 月号（第 26 巻第 3 号　通巻 190 号），p.159「8 ミリ仲間を圧倒した一般の観客が，しかも男女を問わず若い人たちが熱心に最後まで観覧してくださったことは，他の公開映写会に見られぬ特色であった」

29　筆者による小松沢甫へのメールインタビューより（2020 年 9 月 20 日返信）

30　森下豊美『商業と芸術の間にある個人制作アニメーションの場についての考察－「アニメーション 3 人の会」を手がかりに－』，名古屋芸術大学研究紀要　第 39 巻，2018 年，p.301